昭和二〇年四月歯科医師への医師免許特例措置

小関恒雄

日本医史学雑誌第四十九巻第二号
平成十五年六月二十日発行
平成十四年十一月八日受付

日中戦争が激化して、昭和一五年五月政府は軍医養成（確保）の主目的で帝国大学、医科大学（官立六校）計一三校に臨時医学専門部を設置した。[1][2] 戦争は泥沼化し、やがて大東亜戦争に拡大する。市井の医師も次々と軍医に徴用され、いわゆる銃後の医療にも支障を来してくる。昭和一八年一〇月「戦時非常措置」（閣議決定）により、官公私立の医学専門学校が続々と誕生した。それでも追付かなくなると、短縮繰上げ卒業が講じられ、終には、以降述べる、歯科医師の特例措置による（短期養成後）医師免許の交付にまで至るのである。一部既に神谷が論じているが、[1] 以下追補を試みたい。

○

上述医師補給措置の流れの中で、昭和二〇年（一九四五）四月六日「医師免許ノ特例ニ関スル件」なる勅令二一六号が公布された。即ち「官立、公立又ハ国民医療法施行令〔昭一七、勅六九五〕第二条第一項第一号ノ規定ニ依リ文部大臣ノ指定シタル私立ノ歯科医学専門学校ヲ卒業シタル者ニシテ一年以上診療ノ修練ヲ経又ハ一年以上診療ニ従事シタルモノハ当分ノ内〔略〕医師試験ヲ受クルコトヲ得　前項ノ規定ニ依リ医師試験ヲ受ケ之ニ合格シタル者ニシテ六月以上診療ノ修練ヲ経タルモノニハ〔略〕医師免許ヲ与フ」というものである。

これには前史があった。遠くは大正一二年一月「医師資格獲得期成同盟会」の請願がなされたが、直接の発端は昭和

一八年五月、日本歯科医師会が歯科医学専門学校卒業者を医学専門学校の上級に入学させるよう、厚生・文部両省に「上申」した時であろう。即ち、「現在歯科医学専門学校卒業者にして医師たるの途は　一は医科大学に入学し四ケ年の課程を修了し医学士となること　一は二三の私立医学専門学校の上級（五年制医専では第四年に、四年制では第三年）に編入せられ二ケ年の課程を修め之を卒業することなれども　前者にありては進学の門戸極めて限定せられ　後者にありては歯科医学専門学校に於て既修せる学科を活すを得るも入学を許可する学校甚だ少数に止る実状にあり」、よって「総て官公私立医学専門学校に於て歯科医学専門学校卒業者に対し普く上級編入の機会を与ふる様当局に於て之が適当なる規定を設け　速に実施せられ」たし、云々。[3]

一つの動きとして、昭和一九年四月、官立の東京高等歯科医学校は東京医学歯学専門学校と改称され（現・東京医科歯科大学）、「医学科」を設けて、中学校卒業生を採る四年コース（定員一〇〇名）と歯科医師を第三学年に編入させる二年コース（定員八〇名）とを発足させた。二年コースの学生（歯科医師）は一九四五年九月に卒業し、医学科第一回卒業生となった（七八名）。しかし、この二年コースは次年度入学者が一九四八年三月卒業し（六九名）、廃止された。即ち、一回生が一年半で、二回生が三年かかって、それぞれ卒業したのは、前者が戦時繰上げ卒業制、後者が戦後一年延長措置が採られたためである。[4]

漸く政府は、昭和二〇年二月、前述日本歯科医師会の「上申」に添った形で、医師急造を図った。即ち、歯科医専卒を短期間に再教育して医師免許を与えることを計画し、同年度臨時措置として慶応大学の付属医学専門部と慈恵医大の付属専門部に「臨時科」を設け、第三学年に各校一六〇名宛を入学させることとした。例えば慶応大学では、二月一五日付「文部省指令」により、一九日生徒募集を発表した。三月一六、一七日試験・試問をなし、四月一一日入学式を行

った（一六〇名）。一八日授業を開始したが、五月の空襲による学校・病院等の焼失、学校疎開、終戦の混乱等に巻込まれ、講義・ポリクリの遺繰は困難を極めた。終戦は急拠医師をつくる根拠を失い、中絶廃科の危機に見舞れたが、何とか翌一九四六年三月卒業に漕着けた（一五八名）、インターン（一年を特例で六ヶ月に短縮）を経て、一一月第一回医師国家試験を受け九二名の合格をみた。[1][5][6] 慈恵医大の該科もほゞ同様の経過をたどって一四四名が卒業した。[7] 上記第一回国家試験はこれら二大学「臨時科」卒業生のためだけのものであった。

話を元に戻す。政府はもっと手短に医師を急造すべく、昭和二〇年四月、勅令二一六号および同勅令施行令（昭二〇・四・二四、厚生省令一五号）、同省告示（昭二〇・五・五、四七号）を発令する。即ち、「医師試験」受験志願の歯科医師には、昭和二〇年においては以下の科目につき試験をする。第一部、生理学、病理学、衛生学、第二部、内科学（小児科学、精神医学を含む）、外科学（整形外科学を含む）、産婦人科学、皮膚科学（泌尿器科学を含む）、耳鼻咽喉科学、眼科学。試験合格者はさらに六ヶ月以上（内科、外科、他一科、各二ヶ月以上）の「修練」を厚生省指定の病院で為さねばならない。

受験者に修学の便宜を与えるため、「試験前講習会」を実施するよう、厚生省衛生局長通牒が各都庁府県に発せられた（昭二〇・五・二）。[3] 即ち、講習会は各都庁府県ごと一ヶ所以上で開催し、講師は医育機関の教授、助教授、講師、官公立病院の医員等に委嘱して、期間は六月一日～七月三〇日の間の五五日（合計三三〇時間）とした。時間割は第一部が生理学二〇時間、病理三〇時間、衛生二〇時間、第二部が内科（含、小児科、精神科）一〇〇時間、外科・整形外科八〇時間、産婦人科三〇時間、皮膚・泌尿器科二〇時間、耳鼻科一五時間、眼科一五時間である（第二部各科時間数の約三分の一は臨床示説でも支障なし）。

医師試験は札幌、仙台、宇都宮、東京、新潟、岐阜、京都、岡山、高松、熊本で、一九四五年九月一五～一九日とある（のち金沢、大阪が追加される〈厚生省告示七〇号、昭二〇・七・九〉）。試験合格者には一九四六年四月から六ヶ月の実地

修練を行った後に医師免許を与える。ただし、この臨時措置は一回限りで中止された[3][8]。

各地の様子はわからないが、少なくとも東京での「前準備講習会」（試験前講習会）は昭和二〇年六月一日から東大、慈恵医大、東京医歯専で行われ、計三六七名（うち女性二九名）が受講した[9]。医師試験は九月一五～一九日に行われた（一五日生理、衛生、一六日病理、一七日内科、眼科、一八日産婦人科、皮膚泌尿器科、一九日外科、耳鼻科）。受験者は約四〇〇名とも二二七五名ともあるが[10][11]、七三名が合格した[11][12]。以下、氏名を列挙する。

花村　信之　服部　久　坂村　友三　酒井　千年　佐藤　直儀　加太岬一郎　野村　博　増田　芳松
田口又一郎　堀内　巌　積田　正　岩上　計助　劉氏　徳音　宮田清次郎　笹本正次郎　松宮　誠一
佐野眞一郎　三浦　清　井口　正一　田島　定　江崎　三夫　梶川　満平[ママ]　豊田　幸二　天津　弘
有元　常樹　佐井　節夫　堀木　利成　斎藤　隆吉　斎藤　長一　鈴木　一男　竹田　三郎　荒田　行良
葛谷　隆一　藤木　武男　内藤禎次郎　植西　重敏　加藤　晴臣　水野　芳郎　佐藤　登　柿下　秀雄
望月　芳文　名倉　義二　山下　初彦　植田　忠　長屋　正男　加藤　孝治　若杉[ママ]　狷介　堀口　忠
岡田　太一　根本　儀一　岡安　恒武　三井田三郎　石本　良雄　稲川林之助　渡辺　健三　倉沢　千景
浜崎　国蔵　西　鷹二　松崎　孝造　平出　忠夫　伊藤　五郎　吉田　許男　吉田　良収　伊佐津正昭
小倉　孝夫　四宮　技　井原　協一　伏谷　圭介　西尾吉兵衛　鈴木　慶吾　大島須恵雄　多田陽太郎
原　喜正

因に試験地は前述一二都市と長崎で、医師試験委員長安井誠一郎[12]、同委員[13]および試験問題[10]は次の通りである（委員の殆どは東大教授）。

田宮　猛雄　庄司　義治　栗山　重信　増田　胤次　髙橋　明　都築　正男　小林　芳人　福田　邦三
古畑　種基　内村　祐之　福田　保　西　成甫　塩谷　卓爾　鈴木　遂　三谷　靖　坂本　秀夫
後藤　正勝　髙木　憲次　柿沼　昊作　白木　正博　坂口　康蔵　大槻　菊男　太田　正雄

生理学（一時間）　蛋白質ノ消化吸収ニ就テ記セ
衛生学（一時間）　飲料水ノ具備スベキ諸条件ヲ列挙セヨ
病理学（二時間）　一、結核症　二、糸毬体腎炎
内科学（二時間）　一、発疹チブス症状　二、浮腫ノ定義及浮腫ニ伴フ重要疾患及ソノ鑑別　三、麻疹ニツイテ　四、躁鬱病
眼科学（一時間）　トラコーマノ症状
産婦人科学（二時間）　一、子宮破裂ノ症状　二、子宮頚癌ノ症状及鑑別
皮膚科学（一時間）　一、軟性下疳ノ症状、療法ヲ述べ硬性下疳トノ相違点ヲ述べヨ　二、淋菌性副睾丸炎ト結核性副睾丸炎ノ症状ノ差異スル所ヲ述べヨ
外科学（二時間）　一、開放性損傷ノ治療法　二、乳癌ノ症状及治療法　三、股関節結核ノ症状ト治療法
耳鼻咽喉科学（一時間）　一、鼓膜破裂ノ療法　二、咽喉後膿瘍ノ診断及療法

以上七三名中、『日本歯科医籍録』（一九五五年版）[14]で拾った諸氏を挙げておく。記載事項は「現住所（一部補足す）、電話、院名・勤務先、本籍、生年月日、学歴、登録年月日番号、略歴、開業年月、学位受領年月・主論文題名、公職、趣味」の順である。例えば、

斎藤長一　秋田県由利郡本荘町美倉町　電二〇六　斎藤歯科医院〔本籍〕*本県〔生年〕明四二・一〇・八〔学歴〕昭六日歯卒〔登録〕昭六・四・二七第一七七〇八号〔略歴〕昭二一医師国家試験合格耳咽科併設、元県歯科医師会代議員歴任〔開業〕昭七・七〔公職〕本荘中、南内越小校医〔趣味〕書道、尺八

以下、各氏を掲載順に羅列、略記する（現住所、院名、生年、学歴、登録年・歯科医籍番号）。一部、略歴も加えた。

伊藤五郎　室蘭市東町　室蘭地方簡易保険局診療所　明45生　昭13東歯卒　昭13・二二二五六号

伊佐津正昭　留萌市明元町　伊佐津歯科医院　大10生　昭17東歯専卒　昭18・三一七〇四号

西　鷹二　札幌市北三条西五丁目　道衛生部　大3生　昭10日歯卒　昭10・二二七三八号

小倉孝夫　旭川市三条通一三丁目　小倉歯科医院　明42生　昭6日大卒　昭6・一八二二三号　〔昭59没〕

吉田良収　北海道上川郡名寄町西三南六　吉田歯科医院　大10生　昭17東歯卒　昭18・三一七三五号

吉田許男　北海道中川郡常盤村音威子府　吉田歯科医院　大2生　昭10日歯卒　昭10・二二〇五六号

斎藤長一　秋田県由利郡本荘町美倉町　斎藤歯科医院　明42生　昭6日歯卒　昭6・一七七〇八号　昭21医師国家試験合格耳咽科併設　〔昭40没〕

斎藤隆吉　秋田県由利郡平沢町上町　斎藤医院　大13生　昭13日歯卒　二六〇五六号　昭22・耳鼻科併設　〔平11没〕

水野芳郎　北海道余市郡余市町黒川町　水野歯科医院　大8生　昭18日歯卒　昭18・三一六三四号

平出忠夫　北海道上川郡江丹別村中央　平出歯科医院　大7生　昭14日歯卒　二六八七〇号

鈴木一男　福島県平市田町六〇　鈴木歯科医院　大1生　昭10東高歯卒　昭10・二二三三九号

岩上計助　埼玉県北葛飾郡杉戸町杉戸　岩上医院　明43生　昭8日歯卒　昭22・一〇二三五二号（ママ）〔医籍〕卒後東大整外科教室、東医歯大医学部等ニ研究　〔一九九二没〕

花村信之　神田駿河台・三楽病院勤務　明36生　大15日歯卒　大15・一二四〇二号　東大歯科二研究後現院歯科医長
昭10医博
服部　久　荒川区尾久町四ノ一六三三　服部歯科医院　大4生　昭12東高歯卒　昭12・二四五二四号
加太岬一郎　大田区女塚町三ノ七　加太歯科医院　明45生　昭9日大卒　昭9・二八〇三五号
佐藤直儀　品川区大井伊藤町五七二六　外・産婦人歯科佐藤医院　明29生　昭4日大卒　一五九〇二号　昭21東医歯
専医科卒、後上大崎紀病院外産婦人科研究〔明39生とも〕[15]
酒井千年　葛飾区上平井町五八九　那須アルミ診療所　明43生　昭10東歯卒　昭10・二一八八六号
宮田清次郎　中野区沼袋町二七六　宮田歯科医院　大4生　昭19日大卒　昭19・三三九〇七号〔昭62没〕
若林狷介　富山県東砺波郡砺波町出町　若林歯科医院　明44生　昭19大阪歯専卒　三四三九七号
石本良雄　新潟県中蒲原郡亀田町仲町　石本歯科医院　大8生　昭19日歯卒　昭19・三四四二二号
岡田太一　敦賀市晴明町三三　岡田歯科医院　大3生　昭11東歯卒　二四二六七号　父ノ医業継承
渡辺健三　岐阜県海津郡高須町高須　渡辺歯科医院　明32生　大13試験合格　大13・一〇五二一号
柿下秀雄　岐阜県吉城郡神岡町東町　柿下歯科医院　明40生　昭5日大卒　昭5・一七一八〇号
長尾正男　名古屋市中区東本重町一　長尾歯科医院　大1生　昭10東歯卒　昭10・二二四六九号
名倉義二　静岡県引佐郡気賀町　名倉医院歯科　明22生　大3東歯卒　二二五七号
植田　忠　愛知県半田市堀崎　植田医院外、歯科　大5生　昭13東高歯卒　二五四三〇号
倉沢千景　長野県上伊那郡小野村　倉沢歯科医院　明34生　大12大阪歯専卒　昭3・一五〇二七号　昭20医師資格取
得図一二〇三七九号
山下初彦　静岡県小笠郡池新田町池新田　山下歯科診療所　大7生　昭18東歯卒　昭18・三二七一九号　昭21医師国

家試験合格（登昭21・3第一二〇六四三号）

佐藤　登　愛知県一宮市石山町二三　佐藤医院歯科　明30生　大10日歯卒　七一〇七号
三浦　清　沼津市本田町　沼津市立第一病院歯科　大4生　大12東歯卒（ママ）　昭12・二四七四四号
望月芳文　清水市清水五七〇　望月診療所　明44生　昭11東高歯卒　昭11・二三三五〇号
堀木利成　大阪府貝塚市近木一〇二八　堀木歯科医院　大3生　大阪歯専卒　昭12・二四三三五号
竹田三郎　京都市中京区麩屋町通錦小路上ル　竹田歯科診療所　大2生　大阪歯専卒　昭10・二二二八九号
内藤禎次郎　舞鶴市浜七七九　内藤歯科診療所　大11生　大阪歯専卒　昭17・三一三二七号
植西重敏　大津市小川町九　植西歯科医院　明44生　大阪歯専卒　昭9・二〇六六六号
葛谷隆一　京都市東山区五条橋東六　葛谷歯科医院　大9生　大阪歯専卒　昭17・三〇四三四号
佐井節夫　神戸市生田区浪花町朝日会館二階　佐井歯科医院　大6生　昭13大阪歯専卒　二五四〇六号
四宮　技　兵庫県三原郡福良町五二　四宮医院　大2生　昭12日大卒　二四八一六号　兵庫医大耳咽科勤務
大島須恵雄　岡山県玉島市通町　大島歯科医院　明41生　昭4日大卒　昭4・一五九一四号
梶川満幸　徳島県三好郡辻町辻岡ノ前　梶川歯科医院　大6生　昭20福岡医歯専卒　昭20・三五五〇三号
多田陽太郎　岡山市下市町五四　多田歯科医院　大11生　昭19東医歯専卒　三三六六三号
田島　定　岡山県笠岡市笠岡二二〇三　田島歯科医院　明20生　大1東歯卒　大2・一五八六号
有元常樹　愛媛県越智郡富田村上徳　有元歯科医院　大2生　昭10大阪歯専卒　昭10・二二四三三号
井ノ口正一　福岡県甘木市馬田一二三二　井ノ口歯科医院　大4生　昭13京城歯専卒　昭13・二六二二七号
浜崎国蔵　長崎県南松浦郡有川町　有川歯科診療所　大2生　昭12京城歯専卒　昭14・二四四七号　昭21医師試験合格後長大ニ研究次デ当地ニ内科開業、更ニ佐世保共済病院産婦人科勤務

豊田幸二　大分県宇佐郡駅川村辛島　豊田医院歯科　大13生　昭20福岡医歯専卒　昭20・三五五〇九号　卒後母校耳鼻科教室ニ研究医師登録第一二〇三六六号父祖三代ノ医業継承〔昭54没〕

江崎三夫　福岡県三池郡高田村岩津　江崎歯科医院　明44生　大9九州歯専卒　大9・二〇九六九号

佐野眞一郎　福岡県飯塚市西菰田二九〇　佐野歯科医院　大7生　昭18九州歯専卒　昭18・三二九五三号

以上、通覧すると彼ら七三名の住所は全国に及んでいるので、試験地は東京だけでなく、札幌から熊本まで十数ヶ所で行われたと思われる。

つぎに同年度版の『日本医籍録』[15]から掲載順に列挙する。記載事項は「専門科名、自営医病院・勤務先、住所、出身地、生年月日、出身校、登録番号、経歴、開業年、学位、趣味」の順である。例えば、

斎藤長一　耳咽科　斎藤医院　秋田県由利郡本荘町善倉町（ママ）　本県出身　明42・10・8生　昭21試験合格　㊐一二〇三七一号　昭6日歯卒業歯科医院開業ノ傍ラ医師国家試験合格　昭22現地ニ歯科ト併業　元県歯医代議員　本荘中南内越小校医　趣味書道、尺八

以下各氏を掲載順に列挙、略記する（専門科名、院名・勤務先、住所、生年、出身校、登録番号、経歴、開業年、学位）。

吉田許男　内小科　吉田医院　北海道上川郡常盤村音威子府　大2生　昭22国家試験合格　㊐一二〇三五八号　昭23開業

平出忠夫　内外科　根守医院　北海道上川郡江丹別村　大7生　昭21試験合格　㊐一二〇三五七号

斎藤長一　耳咽科　斎藤医院　秋田県由利郡本荘町善倉町（ママ）　明42生　昭21試験合格　㊐一二〇三七一号　昭6日歯卒歯科医院開業ノ傍ラ医師国家試験合格　昭22現地ニ歯科ト併業

斎藤隆吉　外耳咽科　斎藤医院　秋田県由利郡平沢町　大3生　昭21試験合格　登一二〇三六七号

鈴木一男　鈴木歯科医院　福島県平市田町四七　大1生　昭20試験合格　登昭22・一二〇四八三号

佐藤直儀　内小産婦歯科　佐藤医院　品川区大井伊藤町五七二六　明39生　昭21東医歯専卒　登昭22[ママ]・12・10、一二〇二九五号　卒後母校内外産科教室ニ研究　昭22紀病院外内婦人科ニ研究　昭27開業

宮田清次郎　内小科　宮田医院　中野区沼袋町二七六　大4生　昭20試験合格　登一二〇二三六号　昭21・6埼玉県大滝村ニ開業、昭26現地移転開業

堀内　巌　小内放科　堀内医院　横浜市中区柏葉三三　明44生　昭20試験合格　登昭22・1・25、一二〇三七二号　昭10東高歯卒　登二二三一〇号　昭20第一[ママ]回医師国家試験合格後群大七条内科教室ニ研究　昭22群馬県東村ニ開業、同25現地移転開業

田口又一郎　内小科　田口医院　神奈川県藤沢市辻堂五六〇一　明45生　昭21試験合格　登一二〇二三二号

積田　正　歯科　積田医院　千葉県安房郡保田町本郷　明36生　昭21試験合格　登一二〇二九七号

岩上計助　整外内外科　岩上医院　埼玉県北葛飾郡杉戸町杉戸　明43生　試験合格　昭8日歯卒後東大整外科教室等ニ研究　昭22開業

名倉義二　内小科　名倉医院　静岡県引佐郡気賀町　明22生　昭21試験合格　登一一九五八六号　昭21・7開業

三井田三郎　内小科　三井田医院　新潟県柏崎市本町八　大1生　昭21試験合格　登昭21・11・4、一二〇二二七号　昭23開業〔昭37没〕

植西重敏　耳い科　植西医院　大津市小川町　明44生　昭21試験及第　登一二〇三四七号　昭21開業

葛谷隆一　耳い科　葛谷医院　京都市東山区五条橋東　大9生　昭21試験合格　登一二〇二三八号

四宮　枝[ママ]　歯耳咽科　四宮医院　兵庫県三原郡福良町　大2生　昭20試験合格　登一二〇三四六号　昭12日大歯卒

後兵庫医大耳鼻科教室勤務　昭22開業
多田陽太郎　内外科　岡山市下市町　大11生　昭20試験合格　㊐一二〇二三五号　目下岡大解剖学教室ニ研究中
大島須恵雄　大島内科医院　岡山県玉島市玉島四五九　明41生　昭21試験合格　㊐一二〇二三一号　岡大北山内科ニ研究　昭22開業
梶川満幸　内外科　梶川医院　徳島県三好郡辻町辻岡前　大6生　昭21福岡医歯専卒　㊐一二〇二三七号　卒後徳島医大付属病院ニ研究　昭22開業
江崎三夫　内外科　江崎医院　福岡県三池郡高田村岩津
豊田幸二　耳い科　豊田医院　大分県宇佐郡駅館村辛島　大13生　昭21試験合格　㊐一二〇三六六号　卒後小倉市立病院耳い科勤務　昭22開業
浜崎国蔵　内皮科　浜崎診療所　長崎県南松浦郡有川町有川郷　大2生　昭20試験合格　㊐一二〇三六八号

因に、次の諸氏は上述一九五五年版には出ていないが、一九五一年版[16]には出ている。以下拾っておく。
小倉孝夫　小内外科　小倉医院　旭川市三条通一三　明42生　㊐一二〇四八四号　昭22開業
伊藤五郎　内小科　三菱鉱業診療所　北海道札幌郡牛稲村（ママ）　明45生　㊐一二〇五六号　昭23来任
西　鷹二　内外科　名寄保健所　北海道上川郡名寄町　大3生　昭21試験合格　㊐一二〇三五五号　昭22医博
吉田良収　内外科　名寄鉄道診療所　北海道上川郡名寄町　大10生　昭22試験合格　㊐一二〇三五四号
なお、いずれの医籍録にも載っていないが、松宮誠一の履歴[17]は管見しえたので以下に記す。
松宮誠一　明42生　滋賀県愛知郡愛知川町出身　昭5東歯専卒　昭5・4・24歯科医籍登録（第一六八七三号）　昭14名大医学部専攻科入学、昭15修了、同年医博　昭15東歯専講師（病理学・口腔病理学）、昭17助教授、昭22教授　昭

20・11・4勅命第二一六号による医師試験に合格　昭22・1・15医籍登録（第一二〇三四〇号）　昭24東歯大教授、昭51学長、昭62死去

さて、各人の「試験合格」年月が昭和二〇～二二年とバラバラである。試験に合格した時点を指すのか、実地修練修了時を指すのか不明であり、また合格発表が一度ではなく数次に亘ったのか、不明である。それに医籍登録年月も昭和二一～二二年とある（ただし、これは各人がそれぞれ登録したためであろうか）。因に松宮誠一の履歴には「昭和二〇年一一月四日　勅命第二一六号による医師試験に合格」「昭和二二年一月一五日　医師登録」[17]とある（ほかに、これら試験合格、医籍登録の日付の不一致には、或は本人の記憶違いや誤植もあるかもしれない）。なお合格時の年齢（数え）は二三歳から六〇歳に及ぶ。

因に免許申請手続[9]の次第を以下に掲げる。

昭和二十年勅令第二百十六号第二項の規定――医師試験を受け合格した者が六月以上診療の修練を経たもの――で、医師免許を受けんとする者は本籍、住所、氏名と前項に該当する事実を記載した申請書に左記の書面を添へ住所地の地方長官を経由して厚生大臣に提出するのである〔略〕。

一、医師試験合格証書の写

二、昭和二十年勅令第二百十六号第二項の規定に依る診療の修練を経たることを証する書面

三、国民医療法施行規則第五条第二号（戸籍謄本又は抄本）及第四号（六年の懲役又は禁錮以上の刑に処せられた者、禁治産者、準禁治産者、精神病者、聾者、唖者及盲者、医事に関し不正の行為ありたる者）に該当することの有無を証する書面

○

以上、「特例措置」による医師七三名を一九五五年版（一部、一九五一版）の歯科医籍録、医籍録で追ったところ、前者

から四八名、後者から二六名（計、実人数五二名）を拾出すことができた。戦後の混乱で調査記載もれもあろう、或は亡くなった方もあろう。折角合格しても登録申請をしなかったり、逆に「医師」に専念し歯科を罷めた方も或はあろうか。一番若手でも八〇歳に達していよう。

そこで前述五二名中、連絡のとれそうな一五名（御当人、係累）に問合せたところ、一〇名の方から回答を戴いた。うち伊佐津正昭、吉田許男両氏は御健在であった。以下、判明した二、三を掲げる。**

（1）各県で行われた試験前講習会は、北海道では札幌（北大医学部医専講堂）で、埼玉県では大宮で行われた。また講習会に行かず、自習した人もある。

（2）医師試験は札幌では北大医学部（北海道庁とも）で行われた。

（3）修練実習は吉田許男氏は北大病院、旭川日赤病院、名寄松宮病院で、斎藤長一氏は秋田女子医専（現・秋田県立中央病院）で受けた。

（4）医師免許取得後、歯科に専念した方、一時無医村に疎開中だったので医科のみ開業し後年都会に戻り歯科に専念（宮田清次郎氏）、歯科の傍ら医科を併設していたが子息（身内）が独立したので歯科に戻る（吉田許男氏）、或は始めから歯科を廃し医科（内科小児科）に専念（三井田三郎氏）と様々である。

（5）学位を取得（西鷹二、花村信之、松宮誠一各氏）。花村氏（一九四八年日本歯大講師、一九六五年逝去）は、我国歯科放射線学の大成者で同学会の初代会長を努めた。[18]また松宮氏は東京歯大ひいては我国歯学界の位人臣を極めた方である。[17]

幸い伊佐津氏、小倉建夫氏より原資料を戴いたので以下に掲げる。

（1）**医師試験合格通知**

医第十六号

昭和二十一年一月三十一日

厚生省医師試験委員長

伊佐津正昭殿

昭和二十年勅令第二百十六号ニ依ル医師試験合格通知ノ件

客年九月施行ノ昭和二十年勅令第二百十六号ニ依ル医師試験ニ合格□□候付テハ左記事項御諒知相成度及通知候也

記

一、貴殿医師免許ヲ受クル為ニハ昭和二十年三月三十日勅令第二百十六号第二項及ビ昭和二十年四月二十四日厚生省令第十五号第三条ニ依リ六ケ月以上ノ診療ノ修練ヲ必要トスルコト

二、右厚生省令ニ定メラレタル修練ノ場所ニ付テハ当省ニ於テ予メ当該施設ト打合セ其ノ諒解ヲ得タル上貴殿ノ現住所等ヲ考慮シ適当ナル施設ヲ追テ通知スベキコト

三、診療ノ修練ハ概ネ三月中旬迄ニハ之ヲ開始スル見込ナルコト

四、診療修練ノ期間中ニ於ケル指導医等ニ対スル謝金、修練ノ為ノ施設ノ損料ハ国庫ヨリ当該施設ニ交付スベキモ生活費ハ修練者ノ自弁トスルコト

備考〔略〕

追而試験合格証書ハ直接郵送致スベク申添候

（2）医師試験合格書〔図1参照〕

（3）合格者の診療修練の件

医第二十七号

昭和二十一年三月五日

厚生省衛生局長印

伊佐津正昭殿

医師試験合格者ノ診療修練ニ関スル件

曩ニ医師試験合格ノ通知致置候処合格者ガ医師免許ヲ受ケル為ニハ更ニ六ケ月以上厚生大臣ノ指定スル施設ニ於テ診療ノ修練ヲ要スルコトト相成居候ニ就テハ左記事項御了知ノ上之ガ診療ノ修練ヲナサレ度

記

一、指定施設

1、施設名　北海道帝国大学医学部附属病院

2、場　所　札幌市北十四条西五丁目

二、修練ヲ為スベキ期間

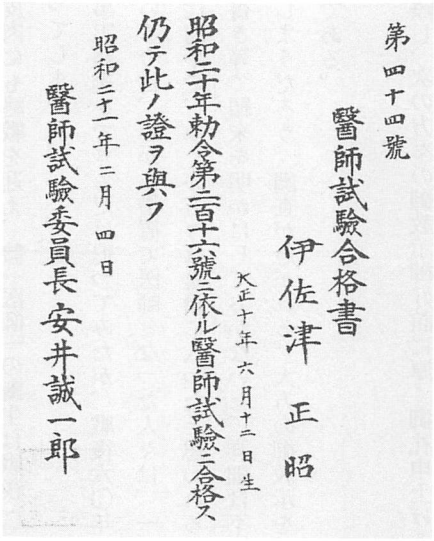
1、期　日　自昭和二十一年三月十五日

至昭和二十一年九月十四日

三、診療修練上ノ注意

1、診療修練ハ内科及外科ニ付テハ各二月以上之ヲ為シ精神科、小児科、整形外科、産婦人科、眼科、皮膚泌尿器科、耳鼻咽喉科、及理学診療科ニ付テハ貴殿ノ選□スル科目ニ付二月以上之ヲ為スヲ要スルモノタルコト

2、修練ニ付テハ施設ノ長ノ指揮指導ヲ遵守スベキコト


第四十四號

醫師試驗合格書

伊佐津　正昭

大正十年六月十二日生

昭和二十年勅令第二百十六號ニ依ル醫師試驗ニ合格ス

仍テ此ノ證ヲ與フ

昭和二十一年二月四日

醫師試驗委員長　安井誠一郎

図1　医師試験合格書
（伊佐津正昭氏提供）

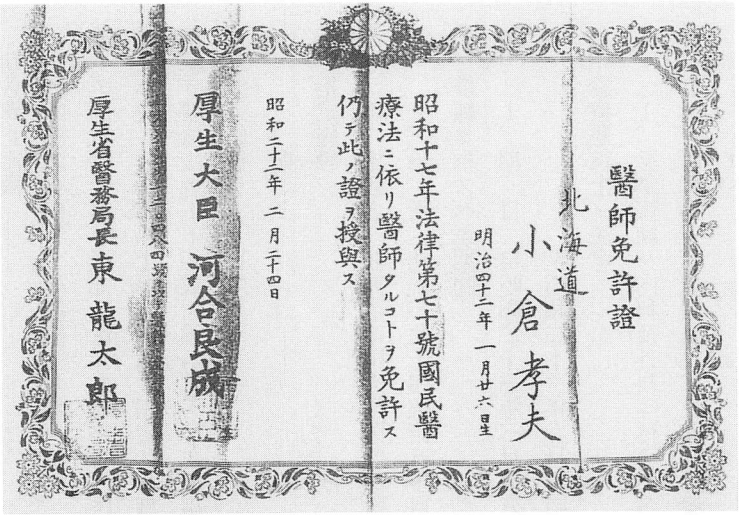

醫師免許證
北海道
小倉孝夫
明治四十二年一月廿六日生
昭和十七年法律第七十號國民醫療法ニ依リ醫師タルコトヲ免許ス
仍テ此ノ證ヲ授與ス
昭和二十一年二月二十四日
厚生大臣　河合良成
厚生省醫務局長　東龍太郎

図 2　特別措置による医師免許証（小倉建夫氏提供）

（4）医師免許証〔図2参照〕

なお、伊佐津氏は試験合格後病を得て修練実習を断念され、結局医師免許は得られなかった。以降歯科に専念され、七七歳の四、五年前に辞められたという。

まとめ

大東亜戦争末期、臨時措置として、歯科医学専門学校を卒業した歯科医師を「試験」の上、医師免許を与える特例が一回だけ行われた。そもそも戦局激化による軍医急造に端を発した措置であったが、皮肉にも終戦を迎え、該「医師」の誕生は戦後（一九四六年）となってしまった。

以上の事実経過をできるだけ追ってみたが、戦後六〇年になろうとしている今日、かかる措置で医師となった人々は、一番若手でも八十代前半で、多くの方々は鬼籍に入ったと思われる。今のうちに聞書き等で顛末を明かにしておかないと、詳細は不明のまま埋れてしまうだろう。調査が急がれる。大方の御教示をお願いする次第である。

擱筆に際し、次の方々の御教示御好誼に厚く御礼申上げる（敬称

略）。榊原悠紀田郎、樋口輝雄、布施輝夫、会田恵、伊佐津正昭、吉田許男、小倉建夫、斎藤長俊、斎藤隆一、岩上栄吉、宮田令夫人、花井祐一、布施栄明、浅野忠、阿部吉夫、正木繁、新井勉、風間秀一、瀬谷勝、葛谷隆一、豊田歯科医院、日本歯科大学歯学部図書館。

文　献

（1）神谷昭典、『日本近代医学の相剋』、医療図書出版社、一九九二
（2）小関恒雄、臨時付属医学専門部設置の経緯、日本医事新報、四〇三〇号、一一七―一一八頁、二〇〇一
（3）『歯科医事衛生史』後巻、日本歯科医師会、一九五八
（4）長尾優、『一筋の歯学への道普請――東京医科歯科大学のあゆみ――』、医歯薬出版、一九六六
（5）『慶応義塾百年史』中巻（後）、慶応義塾、一九六四
（6）『慶応義塾大学附属医学専門部史』、慶応義塾大学、一九五三
（7）『東京慈恵会医科大学八十五年史』、東京慈恵会医科大学、一九六五
（8）今田見信、正木正、『日本の歯科医学教育小史』、医歯薬出版、一九七七
（9）日本歯科公報、二巻六号、一〇六頁、一九四五
（10）日本歯科公報、二巻七号、一一五頁、一九四五
（11）日本歯科評論、再刊一号、一五頁、一九四六
（12）官報、五七一六号（一九四六・二・四）
（13）日本歯科公報、二巻九号、一二四頁、一九四五
（14）『日本歯科医籍録』、三版、医学公論社、一九五五
（15）『日本医籍録』、二二版、医学公論社、一九五五
（16）『日本医籍録』、一九版、医学公論社、一九五一

(17) Takuma, S. (ed.): Bibliography for 1906 through 1983 Department of Oral Pathology Tokyo Dental College, Academy H-E, 1983.
(18) 三崎鈔郎、故花村先生に捧ぐ、歯科放射線、六巻六号、一頁、一九六五

＊　拙稿中、この項（八ケ所）以外の〔　〕内は著者注（加筆）である。

＊＊葛谷隆一氏も健在、八三歳、京都で開業中。試験前講習は京大と府立医大で半分ずつ受く。医師試験は立命館の大講堂で行われ（二二〇名程）、六名合格。氏は修練を府立医大（耳鼻科のみ京都第一日赤）で受く。免許を得、耳鼻科開業・歯科併設、のち歯科専念、今日に至る。